

或云、是恐らくは僞ならんか、時々如此の書付ありといふ。

〔老人雜話〕上老人は江村專齋也、諱宗、具業醫、初加藤肥牧に事へ、後ち森作牧に事ふ、永祿八年光源院殿○足利義輝亂の年生れ、寛文四年九月没す、滿百歲也。

〔慶長見聞集〕養心齋長命の事

見しは今、養心齋といひて歳の限りしらぬ老人、當年江戸へ來たりたりしが、三百年以來の時代を見たりといひて、くはしく物語なせり、康安二年二月朔日、惡星出現して、天地變異せし事共多かりし、近江の水海十丈程ひたりけるに、様々の不思議あり、先白髮明神の前なる沖にまはり、十ひろ計りなる瑠璃の柱立ならべ、五丁ばかりのそり橋水の上に浮たり、水底すみわたりて、竹生島より三の浦の間に龍宮有て、金玉のうてな、七寶莊嚴あきらかにあらはれ、龍神の往來の爲體、手に鏡を取て見るがごとし、心言葉も及ばれず、諸人見物せり、我もよく見たりと委しく語る、某聞て其年號を考るに、慶長十九より當年迄は二百五十三年になりぬ、是はふしぎ也、御身何とて長命なるやと問ば、老人答て、我常に心安んずる是養生、白居易が詩に、たゞよく心閑則身もす、しといへり、夫人間の壽命は天地人の三六を合て、百八十歳のよはひをたもつ事、是さだまれり、然るに身の行ひ道にたがひて、後醫術を盡すといへども、日暮て道をいそぐに異ならず、すべて養生の道といふは、少年より老年に至る迄、おこたることなきを以て、聖人の道とせり、故に養生は損せざるを以て、延年の術とす、其上身をいとむ事、第一食物、第二きる物、第三居る所なり、此三ツをつゝしめり、四百四種の病は宿食を根本とし、三途八難のくるしびは、女人を根本とすと、南山大師の遺教なり、富貴にして苦あり、苦は心の危憂にあり、貧賤にして樂みあり、樂は身の自由にありと、樂天がいひしも、誠に妙言なり、心の安き程のたのしみたえてなし、彭祖がいさめに服藥千てうより、一夜の獨宿にはしかじと云々、人間は衣食居醫の四ツを用ひ、精汁を深くつゝ、